青山同窓会会報

発行所／青山同窓会
〒951 新潟市関屋下川原町2-635
新潟県立新潟高等学校内
TEL0252-66-2131
編集・発行人／上村光司
印刷所／オリオン印刷㈱
〒950 新潟市南出来島1-19-1
TEL0252-83-2151
FAX0252-83-3804

あけまして おめでとうございます

青山同窓会会長　鍵冨清一郎

昨年の暮れには、ラグビー部が県代表として全国大会へ初出場というれしいニュースがありました。全国の同窓からも、お祝いの手紙や、カンパがたくさん寄せられました。地元新潟でも、早速同窓会が中心となり、ラグビー部のOBも一緒に応援の為の募金をはじめましたところ、暮の忙しい時なのに、各期幹事の皆さんが仲間をまわってくれたり又、職場単位で奉賀帳をまわしてくれて集めたり、又振込や書留で送ってくれた人ありと、またたく間に、予定した以上があつまりました。これも、会員の母校愛、後輩愛のおかげとありがたく感謝しています。試合は残念ながら、一回戦で負けましたが、これだけ同窓会を燃えさせてくれたラグビー部生徒、関係者の人々に、ありがとうとお礼をいいます。

今年も、皆んなで楽しい同窓会をもりたてていきましょう。

年頭随想

新年の楽しみ

校内幹事　上杉雅之

年賀状の添え書きを読むのは新年を迎える楽しみの一つである。今年も数多くの教え子から賀状が届いたが、その添え書きは、各人各様の近況や抱負を伝えてくれ心暖まるものが多い。今年一番目立ったものは、なんといってもラグビー部花園大会出場に関するものであった。〝ラグビー部、全国大会出場おめでとうございます〟に始まって〝ラグビーの一戦を楽しみにして年を越します〟〝夢にも思わなかった「新潟高校」の花園ラグビー初出場にはビックリ！思わずビデオに撮りました〟これはある社の新聞記者をしている教え子から。〝ラグビーすばらしかったですね、負けたけど。来年は花園で一勝するように〟との励ましも。

〝ラグビーは負けた。しかしタックルに精進したのは立派でした〟人生での勝利につながると語りかけんばかりのお言葉を下さったのは、本校にまだラグビー部がなかった頃の大先輩。高校教師になって五年、花園のすぐ隣町にある高校で教鞭をとっているOGから〝本校のラグビー部も初出場を目指してがんばっています。来年は花園出場の夢を果たし、出場二回目の新潟高校との対戦を目のあたりにしたいものです〟これはビックな夢である。〝ラグビーの全国大会出場うらやましい限りでありました。今度は是非サッカー部後輩の晴姿を見たいものです〟とはサッカー部OBより。野球部OBからもこの種の望みを後輩に託す添え書きがあったのは当然。

ともあれ、本校ラグビー部の花園出場が咲かせてくれた賀状の添え書きの花の数々、雪深い新年を暖かい気分で包んでくれるようであった。

おめでとうラグビー部

花園全国大会で堂々の入場行進

ラグビー部花園大会出場募金御礼

ラグビー部花園大会出場募金は関係各位の熱烈なご支援を賜り、所期以上の成果をおさめることができました。

同窓会、PTA、学校三者による募金活動で、全体で千七百万円余のご援助をいただきました。

ラグビー部も創部以来初の快挙とあって、皆様の暖かい援助と激励によって、心おきなく花園の会場で活躍することができました。

とりあえず、会報を通じまして同窓会会員各位に厚く御礼申し上げます。

同窓会会長　鍵冨清一郎

今回のラクビー部の快挙に学校側では、在校生の希望者をつのり、又、一年生のラグビー部員や、その父兄、等々バス三台の応援団が、試合の前夜新潟高校発で、花園へ向かいました。参加した生徒達の声を聞いてみました。

その1

さすがに目の前で試合が展開されているだけあって、選手たちの気迫が、ひしひしと伝わってきた。惜しくも負けてしまったが、花園のこの空気を感じられたことは、一生忘れられない。

その2

後半スルスルと我校のガードを抜けて、トライしていくのを見るのが辛かった。でもあの大舞台に、新潟高校のユニフォームがあるのが、むしょうに嬉しく、天気の良い、気持ちのよい一日でした。

おめでとう小林君
インターハイ(金沢)で優勝、走巾跳7m40cm

母校から高校チャンピオンが生まれました。走巾跳の小林義治君(3の6)です。新潟県高校新記録でのインターハイ優勝、本当におめでとう。

編集部では、卒業を前に忙しい小林君に感想を綴ってもらいました。

僕にとってこの夏のインターハイは、生涯忘れることのできないものになりました。その日は暑さのために体のコンディションは決して良い状態ではなく、午前中の走幅跳の予選と午後からのリレーの予選が終わった時には、もうとても競技ができる状態ではありませんでした。しかし、マッサージやスポーツドリンク、ブドウ糖の錠剤、さらに決勝が始まる少し前に三浦先生からいただいた氷のおかげで、競技場内に入ったときにはすでに疲れなどは全く感じられませんでした。

競技が始まり、僕はファールをしないようにし、あとは何も考えずに跳んだら、2回目に7M40という自分でも信じられないような記録が出てしまいました。しかし、そのときはこの記録で優勝できるとは全く頭になく、ただ新潟県の高校記録を破ったということだけしか考えていませんでした。結局、この7M40が優勝記録となったわけですが、歴代の優勝記録よりも少し劣るので欲をいえば、もう10cm位、欲しかったところです。

このインターハイ優勝ということは、昨年の秋田インターハイの予選落ちから比べると雲泥の差のわけですが、やはり、この優勝は顧問の三浦・宮田先生をはじめ、部長、マネージャー、そして陸上競技部の部員全員、さらに、スタンドから応援していただいた校長先生のおかげで成し遂げられたものと思っています。

本当に今年は、良い年で終わったわけですが、これに甘んじることなく来年もまた頑張りたいと思います。

ラグビー部関係者の声特集

山中直樹監督に聞きました

試合前に選手諸君に指示されたことは?

皆様の温かい励ましがあってここまで来れた。感謝の気持をプレーに表わそう。

一、今日まで練習した総てを出そう。

二、失敗を恐れず思い切ったプレーをしよう。

三、タックルだけは相手に敗けないように。

試合中の選手諸君はいかがでしたか。また相手チームの印象はいかがですか。

選手はよくやってくれたと思います。ただし、本校らしい試合運びが出来ず残念でした。筑紫丘高校は本校と同じ進学校、そのチームが実に素晴らしいファイトとパワフルなプレーを展開してくれ膚でその強さを感じ取れた事は、よい勉強になりました。

試合をされて、今後克服して行くべきことがあったらお願いします。

花園へ種をまいてきました、これからは芽を出し、大きな花を咲かせる為に一日、一日をおろそかにせず、何事に対してもベストを尽くす事が一番大切であり、いざと言う時に本来の力を発揮出来るものと思います。

最後に地区大会からの全体を通して、ご感想をひと言。

県内大会、全国大会、いづれも、同年代の高校生の試合ですが、上位大会になる程、大きなプレッシャーがかかり平常心で戦えなくなるものです。色々な事態を想定してやって来たつもりでしたが、もっと、もっと緊迫した状況下での鍛練が必要です。県大会優勝、全国大会出場という伝統は作られました。捲土重来、敗戦は次の勝利への出発を合言葉に今後頑張ってまいります。

最後になりましたが、皆様からの熱意ある応援、ご支援に感謝致しております。有難うございました。

マネージメントなど蔭でご苦労された顧問の中野先生ご感想を

同窓、OB、御父兄、先生方の沢山の方々からの声援を受けて、雪の新潟から太陽のふりそそぐ群馬、大阪での合宿生活。寒いとはいえ、年中土の感触を味わっての生活。生徒の方も最初戸惑いながらも徐々に勘を取り戻し、本番へ本来の調子へ持っていけたのは、さすが監督、部長の力は偉大である。大企業とはいえ、専用のグラウンドと三洋町といえるほどの敷地の広さには驚かされた。大阪の宿舎もさすが、目黒高・近鉄ラグビーチームの合宿地だけあって平場から登るときの急坂(宿舎へ近づくほど傾斜が急)を登り下りするのには、周囲の静けさと景色の雄大さと共に部員のトレーニング等も兼ねて大変良かった。

試合の結果はともかく、花園の地を精一杯踏めたことは大いに満足であった。

関根部長59回に聞きました

試合が終った今、御感想を

ノーサイドの笛が鳴った時一つの旅路が終った。創部以来38年間、先輩達が夢に見て来た花園の旅が。それは新たな門出の笛でもあろう。私が本校三年の昭和25年秋、花園をめざして県下を制し、北陸予選決勝で富山南と同点引分、代表権を得られなかった。その思いは大学、教員と続けたラグビー生活のエネルギーの炉心となっていた。その夢が現実のものとなってエビ茶のジャージーが花園を乱舞したのだ。よくぞ三年生は続けてくれたと熱いものがこみ上げて来ている。

↑鈴木校長　↑関根先生

しかし全国の壁はなお厚い。初戦突破を果せなかった思いは、後輩に受けつがれ、いずれの時か達せられるべき希望の星となるであろう。

〝花園の　道なを深し　初詣〟

応援して下さった方々に一言を……

此度の花園遠征については青山ラガークラブを始めとする青山同窓会、教職員、保護者、市民等々大勢の方々より物心両面にわたる応援をいただきました。このお力添えで安心して練習と試合に専念することができました。これ程までに多方面からご声援があろうとは、失礼ながら思いもよらなかった事でした。何とお礼を申すべきか言葉も無いのです。〝筆舌に尽し難い〟という言葉は知ってはいましたが、はじめてそれを実感したのであります。ラグビー部を代表して心より感謝申し上げるものです。この感激は次のチームの励みでもあり、更に努力を重ねて新たな目標に全力を尽し、皆様方の御厚情にむくいたいと思います。

キャプテン浜藤直人君(三年)

試合の感想はどうでしたか

みんなタックルだけはよくやった。それであの点差なのだから実力的に相手の方が全てにおいて上手だった。

キャプテンとして試合中特に心がけたことは何ですか

一人一人気合いが入っていたので点差が離れてもみんなの闘志は消えなかった。だから自分がキャプテンとして特に心がけたことなどなかった。

試合が終った今、何をしたいと思いますか。

素直に勉強に専念したいと思います。

新潟高校の後輩に望むこと。

大差の中で闘志だけは失わなかった。一回戦敗退で威張れるものなど何もないが、最

(三面につづく)

（二面よりつづく）

後まであきらめなかった自分達が誇りです。

その他に何か？

数多くの方々の応援のおかげで、負けたとはいえ憧れの花園のグランドで気持ちよくプレーすることができました。年末のあわただしい中でいろいろな面において応援して下さった方々に対して感謝の気持ちでいっぱいです。

ありがとうございました

学校長　鈴木昭二

このたび、本校ラグビー部は、厳しい予選を勝ち抜いて第六十五回全国高等学校ラグビーフットボール大会に県代表として出場しました。残念ながら一回戦で敗退、初出場の一回戦突破の難しさを痛感しましたが、ラグビー部発足以来三十八年、始めての「花園」出場であり、本校九十三年の歴史に輝かしい一ページを残した快挙であったと思います。

この快挙は、多くの先輩が築かれた土台の上に部員七十五名の総力を集めた結果であり、なかでも「花園」を目指し精進を続けた三年生部員の努力による所が大きいのです。これもひとえにご家庭の深い理解と関係各位のご声援のたまものと心から感謝いたしております。なお、本校は各部のインターハイをはじめとする各種大会での活躍に対し、昭和六十年度新潟県高等学校スポーツ最優秀校に選ばれましたが、ラグビー部の全国大会出場はこの栄誉に花をそえたものと喜びに絶えません。

本校ラグビー部の県内制覇と全国大会出場は、県内各高校はもとより各方面から、文武両道、すばらしい高校教育の体現であり、県内各高校の大きな励みになると賞讃の言葉をいただきました。私は発展してゆく社会で活躍するには横溢した体力・気力の体得が必要と思っています。今後とも勉強はもとよりスポーツ活動にも力を注いで参るつもりです。

初戦で敗れたりとはいえ、生駒連山のふもと、冬の陽を一杯に浴びた憧れの「花園」で選手諸君はすばらしいファイトで、随所に果敢なタックルを見せてくれました。高校生活のすばらしい思い出として一生心に残ることと思います。

おわりに、今回の大会出場に際しまして会長さん、副会長さん、各期の幹事さん始め同窓の皆様より多くの激励費とご声援をたまわりましたことに厚く御礼申しあげごあいさつといたします。

寄稿

ラグビーと人間

74回　大野　晃（毎日新聞社）

「ラグビー部、史上初の全国大会出場」朗報に、胸躍る思いである。全国大会を主催する毎日新聞社の、運動部、しかもラグビー記者として生計をたてている私にとっては、二重、三重の喜びである。

ようやく、「母校を記事化できる」。念願の夢が実現した。

公正な報道を使命とする記者とはいえ、やはり人の子。母校の明るい話題が書ければ、これ以上のことはない。そのラグビー部を率いる監督が、山中直樹先生だと聞いて奇しき因縁に驚かざるを得ない。

私がラグビー部に所属していた昭和30年代末から、昭和40年代初めに、先達の新潟高、新潟商に追いつき追い越せと新潟工を鍛え抜いておられたのが山中先生だった。私が卒業した翌年の昭和42年に新潟工は全国大会初出場を成しとげ、以後16年連続出場。この間にベスト4が2回、ベスト8は4回。高校ラグビー界における新潟のレベルアップに大きく貢献した。

今回新潟高が決勝で破った新潟工の監督は、私より4年上の三日月稔先輩。皮肉な巡り合わせも、結果的には、ほほえましい。

早慶、早明戦が東京国立競技場を超満員にし、ラグビー熱は、高まるばかりである。

「なぜ、今ラグビーか」。何度も問われ、正確な返答はできないでいる。ただ、いくつかの推測はできる。熟年層には青春を追憶する時間と場を用意し、女性には、体を張った男らしさが魅力となり、格闘と競争をミックスしたゲーム自体に面白さがある。だが、それだけとは思えない。トライという目的のために、自らを犠牲とし、他を助け、闘争心をムキ出しにしながらもルールにそって自制し、勝利を心から喜び合い、敗北を共にかみしめる。そんな姿が、観る者に、日常生活で忘れかけていた人間の尊さを思い起こさせるから熱中できるのではなかろうか。がんじがらめの管理社会からの人間性解放を求める心の叫びが、ラグビーブームを呼んだといえないか。

だからこそ、厳しい受験体制下で、勉強とラグビーの両立に挑んだ後輩たちに、まぶしい程の人間の輝きを感じるのである。

第二十九回県学生科学賞高校の部
生物部最優秀賞を受賞
全国2等賞入選

読売科学賞として知られる本賞は全国規模で行われる中、高校科学部関係のコンクールとして最も権威のある催しで、県大会の予選をかねて、各県で県教育委員会・読売新聞社主催・三菱電気協賛で毎年行われている。過去二回、生物部は優秀賞を受賞しているが、最優秀賞受賞・県代表は初めてである。

受賞したのは、「イトヨの研究」―降海型、陸封型およびその交雑個体の比較研究―で、生物部の水棲生物班がほぼ十年間手がけた研究をまとめたもので、今回のまとめは二年生部員三名があたったが、この研究にはOBも含め延べ三十三名の部員が関係しており、喜びもひとしおである。

この十年間実際に指導されたのは田村栄光教諭―66回卒―（昨年4月新潟北高等学校へ転出）で、今回異例のことであるが、新潟高校における優れた指導を讃えて指導者賞が贈られた。

イトヨは本来海で生活し、春先に産卵のために川を遡上して、産卵を終れば、親はそこで死んでしまうサケと同じような習性を持った魚である。ところが、日本のところどころの川の上流には、同年海に戻らず、川で一生を終えるイトヨが知られている。これを陸封型と呼ぶのである。このグループも今までの分類では同種とされているが、形態や生態がかなり普通のイトヨ（降海型）と違っているように見える。そこで、両者が生物学的にどれだけ違うのか、あるいは、既に別種にまで分化しているのではないか―それを調べてみようというのが研究テーマである。

研究方法は、両者の間の生殖能力の比較が中心になるが、生息環境の非常に違う両型を交配させる必要があり、その前提として、室内で周年飼育する方法が確立されなければならない。陸封型の生息環境は湧き水で、年間18℃以下の低温であるのに、生物教室は夏には連日30℃をかるく越すのである。これの克服が最も困難で、何年間も全滅の苦汁を味わった。結局、人力による水替え、砂洗い、氷による冷却しかなかった。受賞は内容のレベルも勿論ではあろうが、十年におよぶ地道な継続研究の努力が評価されたものと思われる。

中央での審査は二等賞入選で、スポーツの全国大会に準えれば二回戦勝ということになろうか。中央の表彰式は一月十日新宿の京王プラザホテルで行われた。

昭和60年度 青山同窓会総会

七月十八日㈭に、いつものとおりオークラホテル新潟を会場に開催された。

議事として、今年は役員改選の年であるが、全員留任の事とし、空席となっていた副会長には、幹事長の上村光司氏を新しく選出した。決算、予算については拍手をもって承認された。

その後例年の如くの懇親会が行われた。

東京青山同窓会

総会は、11月14日㈭サンケイホールを会場に、新潟から来賓として、副会長50回上村光司氏校内幹事60回上杉雅之氏、母校事務局岩田はす枝さんを迎えて開催された。

南学会長の挨拶、田中幹事長の会務報告にひきつづき、74回和泉潤君の司会により、講師に75回大野晃君を迎えて「スポーツ記者15年の哀歓」と題する講演会に移りました。

その後の懇親会では、先輩後輩入り交じり、アトラクション、校歌、応援歌、エールと楽しい時をすごしました。

東京青山同窓会も、年々人数は増えて来ましたので、**事務局**を、〒102東京都千代田区二番町八の二十「二番町ビル3F」㈱東京博文堂 鶴巻貴弘70回におねがいいたしました。

又財政的バックアップのため、**会費**――年間維持費として、**一口千円をなるべく二口以上**として、学年幹事又は右の事務局、又は、**郵便振替口座――東京五一八八五八**、又は**銀行口座――三和銀行四谷支店普通口座六五四九九**、いずれも東京青山同窓会に収めていただきたいと、参加者にお願いいたしました。

――追憶――新大学長 茂野君を悼む

51回 金子富策

52年前となると記憶は定かではない。しかし、彼と私は昭和8年の4月、一緒に鏡渕尋常小学校に入ったことは間違いない。当時は40数名のクラスに数名の紺絣の着物の友がいた。私は呉服屋の伜であるが、幸いにも洋服を着せてもらって行ったが、茂野君が洋服であったかどうかわからない。兎に角、彼が1年2組で私は1組であった。今は解らぬが、当時の小学校は6年間クラス替もなく、全く転校者以外は6年間一緒ということで、まことにあっさりとしていた。彼のクラスにはM君とかF君という、所謂キカン坊がおり、1組のガキ大将はかく申す私であった。彼は千葉大の斉藤隆英君と共にいつも先頭をゆく秀才であった。

私の組は途中でトップが交替したが、こういう事は珍しい事だったようだ。

中学も一緒に入ったが、一度も同じ組の事はなかった。

だが小学校の同窓会の幹事なるものを仰せつかり、2～3年上の幹事に鍛えられながら中学時代を過した。これはまことに奇得な話で、損得なしの少年の頃だからできた事で、夏休みを大半つぶして幹事職に盡したものだ。

2年上に巻の町立病院の院長の今井勝十郎氏がおり、先日まで西松建設の副社長をしていた本間俊之氏、兼松江商におられた深沢移氏などがおられた。茂野君も私も時にコツンを頂きながら〝父帰る〟や〝神崎与五郎東下り〟など劇の練習に精を出した。総会では小豆湯やおでんを売り費用に当てた。彼はやはり控えめながら、絶対に人に忘れられない人柄を見せていた。

事柄は覚えていないが又あの頃はまだ俳句などひねっていないけれど妙に信頼感のある、真面目な付合であった。

故 茂野録良君

当時少々ませていて、衒気たっぷりな小生など鼻持ちならぬ存在であったと思うが、いつもニコニコした応待はそれ自体彼の人物を物語っている。のちの彼の素地はそこらにあったのだろう。

同窓会となるともう一言付言するが、この幹事は鏡渕のエリートで、前記の諸氏は皆所謂四修で(中学四年終了で)旧制高校に入っている。一年下の坂井洋一君もしかり。ただ私の学年は、大秀才はいなかったが、それなりに優秀な者が多かった。これはやはり素質もさる事ながら、先輩の薫陶がよかった事と信じている。第一会話のレベルが高く、叱責を受けた事はあるが現代のいじめは勿論運動部などに残っていた蛮からもなく……

…エリート集団としか云い様がない。漱石、欧外からモーパッサンやトルストイが語られたように思う。中学初年としては相当なものと思う。

茂野君もそんなとき、興味深そうに聞いていたり、中に入ったりしていたようだ。

今考えても理想的な少年の集まりで、孫にもその歳になったら入門させたい位である。

おしむらくは、私が受け継いだ頃時勢が悪すぎて、継続が因難になった。だがその頃の交誼は未だ連綿と続き現在もよく先輩や後輩から教えてもらう事が多い。

彼は中学5年で海兵へ行ったが、海兵へ行って一号生徒だか任官してか、終戦を迎えた。無事帰郷し新潟医大に入るまでのいきさつは私には分らない。大事な事はその前の冬の夜にあった。ある晩、確か寒夜だったような気がするが、私を尋ねてきた。欠闕を敍して用件を問うと彼は独乙語を教えてくれと答えた。一瞬びっくりしたが、すぐ全体がわかった。海兵では独乙語は教えず、医学部は独乙語が主流という悪い組合わせがあったのだと思う。私は当時旧制高校の理科甲類で、英語が主で独乙語は体裁だけという存在であった。平にご帰還を願ったが、私は小さい事ながら、彼奴は俺より偉い奴だ、という認識を得た。かっての同輩に辞を低うして教えを乞うなど、私の衒気がゆるさない。この小さな事実は、彼が本当のプライドを持ち、私は衒気に溢れていたという事の証明である。やはり大学の学長になる男は一味違っていた。

その後いろいろの事があったが温容変らず、いつもにこやかに人に接していた。

ここで私には残念でたまらぬ事がある。まあ私も大病をやったが、その後やはり億劫な事が多い。彼は自分の病気についての認識はあったようだ。医学部長やったからには学長職についての知識もあったろう。だがご令室の話では夜の席もあり、肉体的にはずい分酷な生活だったらしい。

しかない者だが役所の経験のある私には学長職は見当がつく。要するに真面目な者には仲々つらい職務と考えられる。体に自信のない者には、夜の席はすべて断る位な厚かましさが必要である。因みに私は結婚式は原則として断わっている。悪いとは思っているが背に腹いや生命にはかえられぬ。賢人で秀才であったが、天は彼に厚顔さを与えなかった。

空を眺めると先程から霰が音を立てている。もう冬だ。彼なら何か一句浮べる事だろう。朴念仁の私には他人の句すら浮んでこない。

君よ、素十や瑞穂ともうお会いしている事だろう。たまに夢に出て、清談の一端でも教えてくれ。かの小学校同窓会のときの如く。

(終)

追悼

石本省吾さんと越乃寒梅

38回卒 近藤 圓

世間の噂によると一本一万円、空き瓶でも五千円、それでも中々手に入らないので人は「幻の銘酒」と呼び、日本中の愛酒家でこの名を知らぬ者はいないという、それが「越乃寒梅」である。これを生み育てた人、新潟中学第三十五回卒の石本省吾（せいご）さんである。

中学時代は端艇部の選手として三番を漕いだ偉丈夫。当時の端艇部では誰も彼も綽名で呼び合っていた。鬼（鈴木篤義氏）猛者（もさ）（中村信一氏）石本さんはなぜかガスモク（塵埃）と呼ばれていたが、後年石本さんは如亭という雅号と共に「賀須茂久」と印にして押していた。

明大政経学部に入ってからもボートの選手で活躍したが昭和三年アムステルダムオリンピックの予選で敗れ、潔くボートから足を洗った。しかし後ろ向きに懸命に漕ぎながらゴールの見えないボートの魅力が石本さんを貫くバックボーンになった。

その後は山岳部へ入って冬の穂高、立山連峰へアタックした。冬山の大自然にとりつかれた石本さんは日本アルプスを踏破しながら十六ミリフィルムで山岳写真を撮り続けた。日本で最初の山岳写真だったという。後年、後輩の冒険家植村直巳氏を密かに援助し続けていた。マッキンリーに出発の前夜彼は「先輩はすごい、こんなすばらしい酒を造って……」と言いながら越乃寒梅を飲んだという。

故 石本さん

昭和八年、家業の石本酒造を継いだが大戦が始まると工場は企業整備の名の下に閉鎖され、やがて敗戦。そして酒さえ造ればどんな酒でも売れた時代であった。そんな風潮を見ながら石本さんはそれに背を向け、亀田の人達に旨いと言って飲んでもらえる酒を造ろうと決意した。

この石本さんに力強い協力者がいた。関東信越国税局鑑定官室長で酒造法に関する第一人者、わが新中第三十一回卒の田中哲郎氏である。役人を辞めた田中氏は石本さんに共鳴し、吟醸酒造りに協力してくれた。

田中氏の指導助言で越乃寒梅の改良が始まった。良い水、良い米、良い杜氏を探し歩きそのために父祖の遺した土地も売却した。赤字続きにも拘らず経済を度外視していい酒造り一筋に突き進み、新潟の造り酒屋の間では「石本は偏屈だ、あれは気違いだ」と言うほどであった。

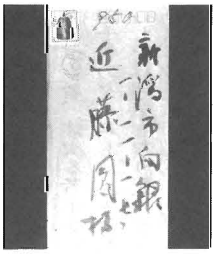
苦難の時代を経て昭和四十年代に入るとさすがに石本さんの苦心は報われ、世の酒と一味違うことが認められ初めた。酒の博士と言われた東大名誉教授の坂口謹一郎氏は、「この酒は日本一の味」と折紙をつけた。また四十二年石本家を訪れた月刊「酒」の編集長で無類の酒通として知られた佐々木久子女史は「越乃寒梅を初めて口にした私は、この世にこんなおいしいお酒があったのか……と仰天した。水の如くさわりなく飲めて、後から旨さが戻ってくる。寒梅の酒質と香気は石本省吾氏の全人格が乗り移った天下一の美酒なのである」と発表した。

佐々木女史によってマスコミに謳い上げられ脚光を浴びるとやがて読売新聞、週刊朝日、現代が「越乃寒梅」を取り上げ地酒ブームが起き、やがて今まで陽が当たらなかった全国の地酒が見直され、脚光を浴びてきたのである。

佐々木女史は石本さんに、「もうちょっと量をふやして東京でも飲めるようにして下さい」と頼んだ。「人間のやることには限界がありましてね。うちは田舎の小さな酒屋です。これで十分儲かっていますから……。私はのめしこきでして……」と答え、いい酒造りの努力はしても売るための努力はしないのめしこきと言っていた。どんなに注文があっても品質が完全保証できる量しか造らないのが石本さんの経営方針であり信念であった。

酒造りにはかたくななまでに一徹の石本さんも、趣味の面では文人墨客型の風流人で書と篆刻を愛した。家にはすばらしい沢山の筆硯を揃え、矢立を持ち歩き気が向くと揮毫するが実にいい味のある字を書いた。私の書は人に上げるようなものではありませんなどと言いながら、私のような後輩には気軽に色紙、短冊、扇面など書いてくれた。篆刻は自らの楽しみと共に気に入った知己にはその姓名に合わせて刻ってくれたものである。

五十七年、妻に先立たれてから入退院をくり返えしていた肺ガンが悪化し、昭和六十年六月二十四日、孤高の酒造家石本省吾は七十五歳の生涯を閉じた。告別式には故人を悼み徳を慕い千二百余人が参列、弔電四百通という地方の一酒造家にしては珍しいことでさすがはと皆感嘆した。



花輪も弔辞も一つとない如何にも石本さんの人間にふさわしい式であった。坂口謹一郎博士は

石本翁の御逝去を悼みて

このくにのうまさけのみちにたてまし たかきいさをしわすれざらめや

と弔歌を捧げ感銘を与えた。

寒嶽院到誉梅薫上善居士

合掌

石本さんの後を継ぐ長男の龍一氏は東京農大を卒え、国税庁醸造試験所研究生の経歴を持ち「子供の頃から酒造りを父に叩き込まれました。父の遺志を継いで亀田の地酒に徹するのが私の役目です」と言っているので越乃寒梅の名声は益々上っても下がることは考えられない。

各クラブ活躍のあしあと

最近の母校現役諸君は、運動部の各クラブとも、各種大会で、めざましい活躍ぶりです。以下に昨年の戦績をお伝えします。

漕艇部

全国大会（河北潟）男子舵手付 フォア一次予選5着、一次敗復3着、上田、遠藤、渡辺、清野、橋本

ジュニア選手権、第一次選考会（戸田、オリンピックコース）男子舵手付フォア2着、上田、若松、渡辺、清野、橋本、秋季新潟県高校漕艇大会（信濃川）男子舵手付フォア1着 上田、若松、渡辺、清野、橋本、男子ナックルフォア2着、金子、堀川、永沢、三富、阿部

陸上部

インターハイ、走幅跳、優勝、小林義治③7m40、女子走高跳、8位、横沢美貴②1m70

第40回国民体育大会、五千米競歩、六位、佐藤元 23分56秒38、

第13回ジュニアオリンピック陸上競技大会、少年A五千米競歩三位、佐藤元 22分51秒57（県高校新）

バドミントン部

秋季バドミントン新潟地区大会、男女団体2位、男子ダブルス、堺、斉藤組2位、

フェンシング部

インターハイ、男女共一回戦敗退、

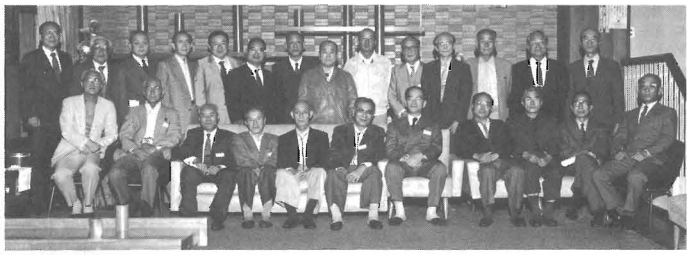
秋季県大会、男子団体優勝、男子個人フルーレ、準決勝プールに進出、斉藤俊英②、木戸雅之②、女子フルーレ 4位、早福恵子②

柔道部

秋季地区大会、中量級、3位 石井②、軽量級、3位、渡辺①

BSN柔道大会、中量級2位、石井②

42回 卒業50周年記念同期会



今年は母校を卒業してから50周年に当るので趣向を変えて、同期会を10月12日～13日湯沢温泉東映ホテルで開催することにした。

集まった面々は、大阪、愛知、仙台より各1名、関東より9名、新潟より13名の合計25名であった。

予想を下廻る出席だったが当日は大安であり、お日柄が良すぎたためもあり、止むを得なかった。

アルコールが入る前に自己紹介をかねて懇談することにした。

何しろ60名近くの戦死者を出した四二回の卒業生なので生き残りの死にっぱぐれの者も多かれ少かれ戦争の犠牲を蒙っている。

生々しい体験談が述べられた。

よくぞ戦中、戦後の苦難を乗り越えて来たものだと感銘を深くした。

社長あり、医師あり、歯科医師あり、校長あり、また会社の第一線は退いたものの、未だ関連会社等で活躍しているもの、地域社会に貢献しているもの等々多士済済であった。

夜は18時より大阪より遠来の樋口君の乾盃の音頭で懇親に入った。

酌むほどに、酔うほどに往年の青陵健児の面影が彷彿として甦り、意気はいよいよ昂まった。

田中君の音頭で校歌の斉唱にはじまり、〝紅の旗征くところ〟と応援歌の大合唱、高山君のプロを思わせる巧なハーモニカ独奏…懐しい〝丘を越えて〟他、宴は盛り上った。

鋤柄君は水彩画の個展を開くほどの腕前、宴席の様子をスケッチしている。

大野君はカメラでは名が通っている、コマメにパチリ、パチリとこれまたスナップを撮っている。(自費で、全員に写真を送ってくれたご厚意に多謝)

鳥羽君の万才三唱で、一応宴を閉じ、各部屋に落付き懐旧談に夜の更けるのを忘れた。

翌日はゴルフのコンペに参加するもの、登山するもの、高山植物を観賞するもの等のグループに分れて、後日の再会を約して解散した。

出席者、**前列**右より　樋口正(大阪)、有田賢一、石山武佐々木庫一(東京)、鋤柄実(旧姓高木、愛知)富田秀雄(旧姓高橋、東京)、鳥羽正隆、(横浜)、相沢康平(東京)、岡嘉一、田中正吾(東京)、東城真佐男(東京)　**後列**　菊地勲長谷川頼清、小泉俊平(仙台)高橋二郎(東京)、西山秀夫、藤田儀資、高山雄次郎、豊岡憲夫、渡辺健治、丸山平次(東京)、広川　治(川崎)、大野総一郎、福田茂夫、中野一松

52回 母校卒業四十年記念全国大会開会

52回　筑波竜二

昭和60年10月12日(土)懸案の青山同窓52回生の、卒業四十周年記念全国大会が開催されました。当日は、文化祭開催中の母校青山会館に集合し、午后3時より第一部が開始されました。住所確認者192名(物故者30名)、出席者第一部59名、第二部20名合計79名、恩師藤田佐市、岩野祐吉、沢山巌、の三先生、来賓君健男先輩がご参加下されました。

第一部(会場青山会館資料室)

沢田義郎君の司会により、開会宣言、物故者へ黙禱、校歌斉唱、経過報告、恩師三先生の祝辞とつゞきまして、各人の在学中、卒業から現在に至る人生航路の発表がありました。それに対し、笑う者、うなづく者、弥次る者まさに四十年のタイムトンネルを逆行した雰囲気となり更に机上の「関屋団子」をパクつくもの、それらのスナップを撮影する斉藤兌カメラマンの活躍……またたくうちに所定の時間が過ぎ第一部を終了し、第二会場へと移動することとなった。

第二部(会場ホテル湖畔)

ホテル差廻しのバス二台に分乗し、市内特に新県庁の建物と駅南開発地区を見学し、会場に到着後記念写真を撮り全員着席した。開宴に先立ち、佐藤隆代議士の国会報告、君知事のご祝辞、乾盃して懇親会に入った。私達は昭和20年3月終戦の春卒業しましたが、生徒は勤労動員や志願兵出陣のためバラ〳〵となり、ついに卒業式の挙行されない校史にも珍らしい同期の桜であります。従って四十年ぶりに再会した者も幾人も居り、胸の名札で確め合いやっと判る顔もありその都度歓声のあがるのがあちこちに見られました。

その夜十数名はホテルに宿泊し、応援歌の歌声は遅くまで鳥屋野潟の波間を渡って消えてゆきました。

73回卒業生大集合！

同期会幹事　73回　小畴弘一

卒業20周年の昨年、同期の仲間に大集合をかけた。6月頃各クラス毎に幹事を決め、まずは不完全な名簿の穴埋め作業。手紙、電話連絡と出席を呼びかけ11月2日関越高速道開通直後の湯沢温泉に出かけた。予定時間が近づくにつれゾロ〳〵と見覚えある顔が集まり始め、ついに100名。渡辺秀英先生をはじめとして先生方も多数参加してくださり大いに盛り上った。昔のままの顔、ちょっと老けた顔、フサフサの人、無くなった人。いかにもオバチャンという人、独身といっても通る人。ワイ〳〵がや〳〵夜のふけるまで大騒ぎ。夜中の2時頃応援歌をどなっている最中に宿の主人に怒られてお開き。翌朝、前夜の疲れもなんのそのあちこちで朝酒を飲み始め、皆すっかりでき上ってしまった。次回は30周年と言ったら「それまでもつかどうか」ということで急遽25周年の幹事を決めて解散。とにかく疲れたが楽しい同期会であった。

青山三三会 喜寿を迎える

33回 佐野賢一郎

大正十五年三月新潟中学を卒業した三三回生は、今年七十七才の喜寿を迎えることになった。われわれの同期会は、三年前の母校九十周年の年に開催して以来である。この間鬼籍に入った物故者も数名あったが、九月二十一日午後五時、十三名がイタリア軒近くの大直に集まった。幸い天気もよかった。

東京から佐藤岩男君、前橋から山添三郎君も上野まで全通した上越新幹線でかけつけてくれた。一同懐旧談に花を咲かせ、皆の顔をみて、今日健康であることをお互いに歓びあった。

名残りはつきなかったが、最後に校歌玲瓏の天を斉唱し強者をうたい、次回の三三会を心に期して午後七時すぎ散会した。

卒業30年 記念大会 青山六三会

青山六三会（昭和30年卒）卒業三十年記念大会は、8月3日(土)、古町どんどん夏祭りでにぎわう新潟は行形亭で開かれた。

30年ぶりで会う顔であっても、やはりどこか面影が残っていて、滝そうめんを食べながら、あるいは控室で名簿と見比べながら「やあ、やあ」「久しぶり！」と輪が次第に大きくなって行く。

やがて定刻。「アンケート等参考にして、結局よき伝統に従い、こういう形となった…」と報告があり、次いで先生、同期生の亡くなられた方々へ黙禱。そして二階へ移動してまず記念撮影。「大丈夫全員入るのか？」と心配する声もあったが、さすがにプロ、和田君が余裕たっぷりに別掲のようにまとめてくれました。

先生方を代表して、沢山（だんご）先生、渡辺（団長）先生の発声で乾杯。若手不足が嘆かれる新潟芸妓界で、現在望みうるベストメンバーによる踊りも入ってムードが盛り上り、横田君の指導で校歌応援歌でしめて、お開きの予定が、本当に中〆めという形でそのまま話しが続く。

やがて、メインの二次会場イタリア軒、又各クラス別の二次会場へ流れ出、結局2時3時のお帰りが多かったとか。

しかも翌日の記念ゴルフ大会には、二日酔いにもめげず、12名も参加し、皆そこそこのスコアでまとまったとはかえって無用のリキミがなくてよかったのか。それにしてもこのスタミナ、さすがは働き盛り、四十八才の抵抗の遊び盛りか。

ちなみに出席者、先生14名、男子77名、女子9名。合計丁度100名。市内近辺在住者がもう少し出席出来たはずだったがと反省点が残るが、次の機会、五年後、十年後には東京との中間点とか、趣向もかえて、もっと盛大に集りたいものです。

先からご挨拶いただき「修学旅行中に学校が火災にあい、三年の時は体育館をしきった仮設教室で勉強した割には優秀な期であった…」とおほめの言葉をいただく。井上（天ちゃん）先生の発声で乾杯。

青山三九会 猪初男君の送別会

39回 福山 健

8月25日(日)快晴、新大学長の任期を了えて、10月には東京へ帰る猪君の送別会を地元有志で開催、新潟駅に集合し咲花温泉の佐取館差し廻しのマイクロバスに乗って出発。

宿に着き先づは一浴、浴衣に着かえて気軽に一同着席。

上原虎雄君の挨拶、猪君の在新二十年の感想、同君の益々の健康を祈り一同乾杯す。

酒、ビール、ウイスキーと飲み合せたためか熟年老童すっかり酔が廻る。

猪君は若い。とても七十才とは思えない。附属小から共に青山に学びこの秀れた友人を見て来た小生には特に感慨浅からざるものあり。

東蒲、上川村が生んだ逸材今後共お元気で。

（当日の出席者）

猪 初男、佐藤平八、佐藤裕雄、阿部尚道、上原虎雄、岡崎清彦、金内一雄、高橋茂登吉、高橋新一、山下八郎、小武内尚三、皆川竹次郎、皆川登良夫、吉田二郎、福山 健

青山柿会 渋例会

復活第九回渋柿会（新中寄宿舎同人）は恒例により十月第一日曜の六日、正午から小甚旅館で開催した。

今回初参加の珍客、39回の医学博士渡辺俊男君を迎えた。岩船郡関川村の旧家の色の黒い坊っちゃんだった氏も白髪の学究に変身していた。札幌五輪で七十メートルジャンプで初優勝した笠谷幸生のトレーニングドクターだったという。これで又渋柿会の平均頭脳が少し上昇した。その他水原の医師丸岡寛君は健康上から欠席したが、医師の立場から会員に毎年精密検査を受けるようにと長文の檄を寄せられた。思い出話に花を咲かせて三時、来年の十月第一日曜を約して散会した。出席者は写真前列左から河内正彦(37)、佐藤賢一郎(33)、永井行蔵(33)、吉川恒吉(36)、後列近藤百文(35)渡辺俊男(39)、近藤圓(38)、武田慎三郎(35)、内田善衛(35)、細野哲雄(38)、幹事 近藤 圓

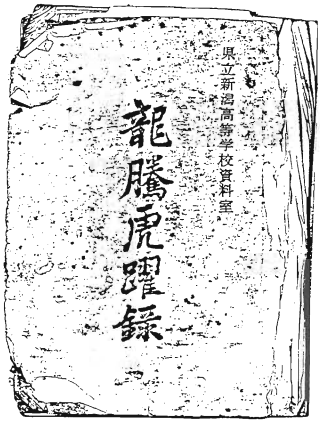
画人笠原軝とその父漁村(八)

60回　小林智明

小黒太白はまた会津八一を坪内逍遙に紹介した早稲田の先輩でもある。(吉池進「会津八一伝」)中学でも三年先輩で互いに家も近かった。会津八一が早稲田へ進んだのは太白の影響であったと聞いたことがある。中学五年の八一が八朔郎と号して、東北日報俳句欄の選者として衆目を集めていた明治三十二～三年頃、太白は〝八朔郎に寄す〟として〝鮭喰ふて腹など撫でて火燵かや〟の句や、〝紅葉山人より俳号を鉄杵とおくられたればと八朔郎の知らせ越したれば〟とて〝梅が香や君脱ぎ替へよ古布子〟などの句を寄せている。八朔郎またこれに応えるという親密なる交遊があった。軝もまたこれら先輩に啓発され、提撕される中学時代であった。

軝が四年生の明治三十四年五月二十五～六日の両日に、寄居浜で行われた新潟県々立学校聯合大運動会は、新潟中学、長岡中学、高田中学、新発田中学、佐渡中学、新潟商業、新潟師範、高田師範の八校が参加して行われたもので、今までにそんな大規模な大会は無かったから、当時の学生達には画期的な壮挙、震天動地の最大事件として迎えられた。五年生の青木得三(九回生)は、「龍騰虎躍録」というA6判二百十六頁の小冊子にこの記録を詳細にまとめて遊方会より出版した。この貴重な記録集は、真保一輔(十三回生)先輩より寄贈された唯一冊が、今母校の資料室に大分ぼろ〳〵になってはいるが、ほぼ完全な姿で存在を留めていることは、後輩のため誠に幸であると言わねばならない。それによると第一日目は野球、撃剣(当時はまだ剣道とは言わなかった)、器械体操、庭球、徒競走、普通体操の六種目が行われ、我が新潟中学校は庭球以外の五種目に出場、ことごとくこれを制覇するという快挙をなしとげた。第二日目は中隊教練が行われた。この興奮は十六才の少年軝の胸にも熱い思い出として残ったことは例外ではなく、後年、青山六十周年記念誌上の「五十年前」という回顧文の中に、その思い出を書き記していることは前述した。ただ彼には、当時の国威の伸張は軍備の拡大とばかりに軍事教育が盛んになり、軍人が巾をきかす世の中になってゆくことに何となく染まぬものもあったようだった。

五月の末から六月の上旬にかけて修学旅行があった。五年生は佐渡、軝ら四、三年生は柏崎地方、二年生は村上地方へ、いづれも六泊七日の徒歩旅行という今では考えられないのんびりした旅行であった。



佐渡へ行った五年組に至っては七日目の帰る日に新潟から船が来ない。翌日も来ない。翌々日になってようやく新潟へ帰ることができた。その間、生徒達は悠々として加茂湖に舟を浮かべて遊んでいた。今日のように定期定時に船が出る時代ではなかった。

八月に京都で行われた大日本武徳会主催の剣道大会には、五年生の伊藤精司と今湊良行が出場して全国優勝を果した。後に陸軍中将になった伊藤精司はさきの寄居浜での大運動会の撃剣の部にも優勝し、時の県知事柏田盛文寄贈の名刀を手にした勇者であった。

またこの年には、与謝野晶子の「みだれ髪」が世に出て〝やは肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を説く君〟などの歌が人口に膾炙され、浪漫的な明星派の歌が抬頭した時代であった。

明けて明治三十五年、冬休が終って一月六日は始業式である。午前八時、六百人の生徒が講堂に入場。続いて職員入場。そこへ多田校長の先導にて柏田県知事も入場して来た。遊方会雑誌十一号の雑報記事を借りると左のようになる。

校長登壇して曰く「言陳腐に似て非なる者は、彼の一日の計は旦にあり一生の計は春に在るといふ事なり。而して今や壬寅の春を迎へてここに始業の式を行ふ。正に大に計るありて一年の否一生の為にすべき也。諸氏過去を憶ひ将来を思ひ、唾手一番し、徳育を涵養し、品性を高め、以って後来為すあるを期せよ。」と次に春は陽気なものなり。雷電亦何となく陽気ならずや。といふでもなからむも、偶然なるかな、鐘声雷公を以って称せられ給ふ渡辺先生の曰く……あまり低からぬ音調にて否、名に愧ぢざる程の新春早々雷声……「天以一而降地以一而康安萬物以一而云々と老子にあるが如く、一以貫之なる有原有果なるべき也。然るに因全ふして果の不らざるは奈何。一年生二百能く業を卒ふるもの果して幾何なるぞ。予の嘆ずる所要はここにあり。」と述べらる。次に柏田知事徐ろに壇をさして進み、薩摩(御郷国)訛の……と見えるように、漁村先生が来賓の県知事の先に大音声で生徒をはげますところが愉快である。聞いている二百人の一年生の中で、一回もイモ(留年)を食わずに順調に卒業した人が第十三回生であるが、卒業名簿から見ると青山十三回生は七十名くらいしかいない。その七十人の中でも何回も留年をしてようやく卒業した人もあるかも知れないと思うと、いかに漁村先生が生徒思いであったかという事がわかる。四年生の軝は父のこの言葉をどんな思いで聞いていたのか、その父に訓育された彼は成績優秀で、留年の味は知らずに卒業することになる。

三月三十一日は第九回生の卒業式で、運動会で勇名を馳せた荒川謙二や伊藤精司。桑野締三、安倍邦太郎(流作場、県教育会長)、山崎良平(小池村、良寛研究家)らが卒業して行った。秀才のほまれ高かった青木得三が祝辞を読み、在校生総代として同級の小柳篤二が祝辞を読んだ。

軝が最高学年の五年生になった四月十四日、桑野締三が県費留学生として清国に出発することになった。上海の東亜同文書院の留学生として、県下の中等学校卒業生の志望者の中より、七名の県費留学生中最優等で選ばれたのである。後年、中国大陸に強い憧憬を持った軝も同級生全員とこの壮途を祝し、午前九時半発の列車を沼垂駅(当時は竜ヶ島駅)に万才三唱して見送った。

東亜同文書院は、当時の欧米列強の極東進出に遅れを取らじと、日清の交流を目的に上海に設立された学校で、校長は杉浦重剛。修業年限は三年で日本各地から留学を希望する若者が多かった。この年はその第二回の留学生が出発したのであった。

三年生の内田誠の〝桑野象水氏の清国に遊学するを送る〟という次のような詩も遊方会誌に見える

異域功名世所希　期君三歳学成帰
壮遊遙想玄洋外　萬里長風拂客衣

初夏の頃には、信濃川にボートを浮かべて端艇部の活動が盛んであった。五月の末には東宮(大正天皇)東北御行啓上覧三校連合ボートレースが行われ新潟中学、新潟商業、新潟師範の選手が日頃の技を競い合った。六月七日の全校をあげての第九回端艇競漕会は、勇ましくも和やかに四十回にも及ぶレースが展開され、軝も何度も級友とオールを組んで競漕した。傑作だったのは職員レースで、ジンツアマ、小黒ジライヤ先生など紅白に別れ武者振りも勇ましく漕ぎ出したが、艇は羊腸の如くうね〳〵と廻り容易に進まず、そのうちに八本のオールは八本共別々の運動を開始する始末、しまいには双方の舳手が転倒するというハプニングにどっと笑いが起った。

(次号につづく)

寄稿

明治末期の中学生活

20回　長沢禄蔵

私が新潟中学で学んだのは、明治41年から大正2年までです。このなかで、話題としてとりあげることは僅かですが、はじめに彗星のことから話しましょう。

〝世紀の天体の饗宴〟ともいえる〝ハレー彗星〟をみたのは、明治43年5月19日、私が三年生のときでした。新潟の海辺へいそいそと赴きました。あちらこちらから集まった人々の眼を捉えたのは、まさに帚の形で、色調が青白く、しかもその全体がピカピカ明滅するイルミネーションの輝きでした。夜空を彩るこの物体は、尾を長く引いた化物のように見えました。かたずを呑んで見ていた人々は、その姿が消えたとき、はじめてホッと溜息をもらしたものです。

私は中学の頃、運動神経はよく、特に競走が得意で、俊足を駆って、リレーなどで活躍しました。野球もやりましたが、捕ること、走ることはよかったのですが、肩が弱かったので、ライトに廻されました。

長沢禄蔵

剣道を父からすすめられたので、一生懸命やりました。

夏休みに新発田に居られた先生のお宅まで、級友の二、三名と自転車のペダルをこいで三時間も走り続けて遊びに伺ったこともありました。下りた時には、脚がガクガクしたことを覚えております。

父長沢市蔵

父の市蔵は、七代目の中学校長でしたが、生徒の〝校長排斥〟のストライキにあい、新潟から鹿児島一中の校長として移りました。そのとき、私一人だけ「校長の息子だから君は参加しなくてもよい」といわれて埒外に置かれ、その様子を知ることはできませんでした。

五年生になって私は教頭先生宅に預けられお世話になり卒業しました。

七十五年も時間が過ぎております。遠い遠い昔の話になってしまいました。

あめゆ会の思い出

23回　清水浩一

明治の末期から、大正の初期では、新潟市内の中等学校といっても、師範、中学、商業の三校だけであった。ようやく医学専門学校(俗に医専)が上級校として、(今日の大学として)誕生したばかりであった。いわゆる普通教育校(今日の小学校)は全市で九校しかなかった。したがって前記の三校、(中等学校)への進学者もごく限られた若者達にしぼられていた。

当時、新潟中学で優秀な仲間は、一高(東京)二高(仙台)三高(京都)四校(金沢)それに東京高師(一橋大)東京工業(工大)外語大それに軍人志望で陸士、海兵が憧れの的であった。したがって教員志望(小学校)などは殆ど皆無であった。私の場合、新潟師範(二部)は、清水唯一人が制服制帽での受験生であった。しかし色々の事情から私の大先輩三人(19回坂田、21回高橋、22回津沢)も受験され、入学されたので、ここに新潟名産の「あめゆ」にあやかって「あめゆ会」と名づける会合が誕生したわけ。毎月一、二回談話室で旧情を温め会ったなつかしい思い出がよみがえってくる。僅か一年とはいえ、あの新中の旧語り……長沢、中馬、渡辺、小平の校長時代、旧校舎の一部炎上からのアンパン事件、中馬校長の刀傷事件、記念行事の提灯行列等々話題も豊富で、時の経つのも知らぬものがあった。

当時の「あめゆ」は新潟中生にははかり知れぬ尊い、嬉れしい、懐しい思い出の数々が連想されて来る。

23年振りに70回生関西親睦会

70回　白江井敦子

関西在住の新潟高校同期生で一度集まりませんか、と思いがけないお電話をいただいたのは、昨年まだ寒いことでした。「県高で同期だった小池です」と言われて、20年余の空白はにわかに埋めがたく受話器のむこうの、関西弁の中にのこっている新潟弁のイントネーションで、ようやくお顔が思い浮かびました。

私は関西といっても三重県でいちばん愛知よりの市、桑名に住んでいますので、いわば名古屋圏です。桑名にまで声をかけてくださったことがうれしく、また、新潟は遠い、神戸から桑名まで入れてもどれくらいいるのか、と思ったことでした。

その「新潟高校70回生関西親睦会」が、9月7日(土)の夕方、大阪曽根崎の鳥よし(茶屋)でひらかれました。参加者は10名、うち4名が女性でした。

卒業してから23年、どこで大学生活を送り、どのようにパートナーとめぐりあい、こどもは何人、いまどんな仕事をして生きているのか、一人一人の23年間の物語のあいだになつかしいあの人この人の消息、きびしくあたたかかった先生方の思い出、はては教育の現状への批判等々と脱線し予定の2時間はあっという間にすぎてしまいました。帰りを急ぐ主婦の方もあり、4時間近くの会を、まだまだ名残惜しい気持いっぱいで7時すぎに閉じました。

それぞれに親となり、こどもたちが、そろそろ高校生になります。いただいた名刺を見ると、男性は皆「長」がつき、設営していただいた会場も、仕事でよく使うとか、それぞれ職場で責任をもってはりきっている様子がうかがえました。姿かたちは、もう紅顔の美少年というわけにはいかない年月がすぎて、髪の毛やらウエストが気になる年令にさしかかり、しかし卒業アルバムをかこんで話がはずめば、学生服の高校生がそこに坐っているような気がしてくるのが不思議でした。女性はみな若々しく、全然かわらない、という男性諸氏の思いやりにみちた総括でした。

こんどはもっとたくさんの方々に呼びかけ、会場も、京都や、名古屋でも、また青山同窓会の関西支部の結成も、と楽しい申しあわせもできました。

当日の出席者は、小池史昭、小泉和代(旧姓伊藤)、塩原聰、西山實、能田直子(旧姓江部)、白江井敦子(旧姓佐藤)、星雅啓、丸山和文、山岸恒夫、渡辺麗子(旧姓大森)の皆さんでした。

関西青山同窓会 開催の動き

右の寄稿にも話しの出ていた様に前後の期に呼びかけて関西青山同窓会をとの希望があります。各期の方々の関西在住者の名簿等の正確なものを事務局へお知らせ下さい。

ハイティーン水泳 新中・新高⑧

60回 平田大六（関川村）

16 下馬評

県下の高校水泳大会をはじめて私は見せられた。

「新潟県体育協会五十年史（一九八二）」の年表によれば、「県高校水上選手権大会昭和二十三年八月一日」とある。さきの下越大会のように中学生でも出場できるという温情はなかったが、来年のためということで、まだ中学生の私たちも会場地の長岡へ前日から連れてゆかれた。

プールサイドには、山本茂郎（新潟商）、俵谷正樹（長岡高）、本間竹志（佐渡高）、等の各校名監督がずらりといて、他校選手の練習ぶりをそれとなく観察していた。特に、その監督たちは、ライバル校で来シーズンから使い物になる中学三年生の選手をマークしていたようだ。そこには、関川重久、後藤正幸（佐渡高）松本行孝、大湊信吾（新潟商）滝本秀雄（高田高）など、やがてその高校の主力となる名選手の卵がいたはずだ。

私たちの大黒善弥（50回）監督を含めて、そうゆう人達が集まってプールサイドで自慢話がはじまった。来年はうちがもらった。いやいや、うちの○○のほうが速い。などとにぎやかに、それは持馬をもっている馬主の気持だった。

私は小さい体をふるわせるようにして「下馬評」の流れてくるプールサイドにすくんでいた。この時の新潟高校の成績は、私の記憶ではさだかでないが、大会が終って帰り道、大黒監督が、来年は平田も晴れて出場できるぞ、と云われたのを覚えている。

17 大先輩の応援

戦争前後には、体育スポーツ大会などほとんどなかったが、昭和二十三年という年は、県内の大会が復活、あるいは新規に開催された年である。

八月の末には「第一回北日本高校水上競技大会」というのがぶちあげられた。名前が大きい。しかし会場の新潟高校へ集まってきたのは県内の選手ばかりだった。この時も中学三年生の私たちにも温情出場が許可され、私は八百三位、千五百二位の成績だった。

この千五百で、私は佐渡高の選手と大デットヒートを演じてしまった。四百をすぎたあたりでとらえたのだが、そこから離れてくれないのだ。

たいていの選手は呼吸するとき左側に顔をあげるが、私は右だ。これだと一往復ごとに相手と顔を合わせることになる。これは右呼吸である私の特権だ。

佐渡高の選手はかみつきそうな顔をして私と並んでくる。ターンをしてプールサイド側に顔をあげると、さっきから、私の泳ぎといっしょに陸（おか）の上を真赫な顔をして移動している老人がいることがわかった。私がまたターンをすると、反対側のサイドにまわって、手を打ちながら応援しつづけている。最後の二十メートル位でようやくふり切って二位にゴールした時、頭の上にその老人がいて、ヤッタヤッタと叫びながら私をひきあげてくれた。おそらく、興奮状態で陸（おか）の上を千五百メートル歩きつゞけられたのにちがいない。

この人が江口文助（21回）大先輩で、日本泳法の神伝流を極められた人である。この北日本大会を期に私は特に私生活の面で江口大先輩のお世話になることになるのだ。

（次号につづく）

関西からの便り

70回 能田直子（旧姓江部）

新年おめでとうございます。

昨年末は、母校ラグビー部の花園出場で、随分と楽しい思いをさせていただきました。

手元の名簿を頼りに、関西在住の卒業生二百数十名に応援案内状を発送、遠く名古屋からも案内状を見て、応援にかけつけて下さり、少しながらも遠来の選手達をはげましてやれたのではないかと思っております。試合は力及ばず大変残念でしたが、久し振りに応援歌を口ずさみ、胸が熱くなるのを覚えました。

新潟を離れて十七年になりますが、たまたま同期の集まりを昨年九月に大阪に持ちました。その席で、同窓会の関西の集まりを何とか実現したいとの話しが出ておりましたところ、今回のラグビーでした。手元の名簿も数年前のものでしたが、発送したうちの約半数（百二、三十通）が転居先不明で返送されてまいりました。

私共も若輩ではありますが、関西の同窓会に関して何かお手伝いできればと考えておるところです。各期の、関西在住者の名簿などを、事務局あるいは各期幹事の方から送っていただけましたら、それらをもとに、少しづつ気長に、まとめてゆきたいと思っております。

更なるご助言をお願いいたします。

編集後記

連絡先〒606 京都市佐京区岩倉中在地町27の12 能田直子

今号には、ラグビー部のうれしいニュース、寄稿が多く集まりました。運動部に負けない生物部の受賞も、地味ながら、キラリと光っています。

文、武両道に強い後輩達に乾杯。先輩達も、負けずに、卒業50周年をはじめ、40、30、20周年と、各期の記念大会が報じられています。多くの集まり、懐しい顔々、写真が小さくて申し訳ないくらいです。

東京青山同窓会に続けと、関西にも同窓会との、声があがっています。それも若手、40才台前半から。大先輩で関西に永住、在住の方も多いことでしょう。声をかけ合って実現して下さい。益々意気盛んな同窓会。

参加と協力を！

昭和59年度青山同窓会収支決算書

（自 昭和59年4月1日 至 昭和60年3月31日）

収入の部

科目	決算額 円	備考
繰越金	208,525	前年度繰越金
入会金	1,105,600	1年生 800円×450人＝360,000円 2・3年生 600円×896人＝537,600円 通信制 2,000円×104人＝208,000円
会費	3,490,000	同窓会年会費　1口 1,000円
雑収入	21,301	預金利子
合計	4,825,426	

支出の部

科目	決算額 円	備考
人件費	2,384,790	職員1人給料手当、社会保険料
通信費	574,590	会報発送、総会、役員会、新年会案内郵便料、振替料負担金
印刷費	36,000	予算、決算、案内状印刷代
慶弔費	49,880	会員慶弔電報料、香華料、離任職員餞別
退職積立金	50,000	
諸費	6,090	消耗品費等
会報印刷費	368,474	年2回発行会報印刷代
会議費	290,460	総会、新年会、役員会、会議費、東京総会、支部総会出席会費及び旅費
卒業生記念品代	156,750	卒業生におくる湯のみ代
青陵祭補助	80,000	
通信制補助	236,500	通信制同窓生会費納入1口につき500円473口分通信同窓会へ補助金として繰出
予備費	100,000	東京同窓会補助金、柔道部顧問、生徒海外遠征激励費
合計	4,333,534	

収支差引残高 491,892円　残高処分案　基金積立 200,000円　次年度繰越 291,892円

昭和60年4月30日

上記の通り相違無いことを確認致します。

監事 福山 健 ㊞

監事 澤山 巌 ㊞

昭和60年度青山同窓会収支予算書

（自 昭和60年4月1日 至 昭和61年3月31日）

収入の部

科目	予算額 円	備考
繰越金	290,000	前年度繰越金
入会金	1,080,000	1年生 1人 800円×450人＝360,000円 2・3年生 1人 600円×900人＝540,000円 通信制 1人2,000円×90人＝180,000円
会費	3,100,000	同窓会年会費　1口 1,000円
雑収入	10,000	預金利子
合計	4,480,000	

支出の部

科目	予算額 円	備考
人件費	2,390,000	職員1人給料、手当、社会保険料
通信費	600,000	会報発送、総会、新年会、役員会案内郵便料、振替料負担金
印刷費	100,000	封筒、振替用紙、予算、決算、案内状印刷代
慶弔費	50,000	会員慶弔電報料、香華料、離任職員餞別
退職積立金	50,000	
諸費	10,000	消耗品費等
会報印刷費	370,000	年2回発行会報印刷代
会議費	300,000	総会、新年会、役員会、会議費、東京総会、支部総会出席会費及び旅費
卒業生記念品代	160,000	
青陵祭補助	80,000	
通信制補助	220,000	通信制同窓生会費納入1口につき500円440口分通信同窓会へ補助金として繰出
予備費	150,000	
合計	4,480,000	

昭和60年度青山同窓会費納入者

（4月より12月末日まで納入済のもの）

未納の方は3月までに納入下さるようお願い致します。

1口1,000円できるだけ2口以上でお願いします。

（郵便振替口座　新潟5-4455青山同窓会
第四銀行学校町支店口座　0275210青山同窓会）

期及氏名
18回
玉木繁治
21回
古田幸三郎
吉田武四郎
22回
近田助治郎
中沢信吉
23回
佐藤俊次一
清水浩辰
西
25回
真保吾一三
長野善夫
26回
伊藤威夫
27回
内山惇澄一丸助一
斎藤中市
田中中英
28回
大谷鐘吾郎
小原武一郎
塚田武雄
野村治三郎
早山洪二清
広橋敏路
松浦懐
松田安愛
村田凡平
山
29回
北村太市郎
田村文三郎
徳永興次郎
松井達夫
武藤経世
30回
伊藤敬太郎
岩瀬冨士雄
上藤種次
遠藤雄
南添広
山宮英直
山辺五二郎
渡辺徳雄
鷲
31回
浅海勝治三
岩佐藤孝午
田藤静也
名村一清
松井道夫
本村深応
守田口東平
山下政蔵
渡
32回
浅岡博吉
大大公郎
笠為吉郎
笠塚六三
木原直郎
北原義雄
久村博松
解村徳治
桑我順雄
小良靖三
斎原力策
沢林凱雄
清山八二
霜水十七
菅鳥重松
竹原憲治
中林松
原彦之

期及氏名
次孝郎
政
山間忠次
山岩次郎
33回
部佐吉
野英実男
木子英就二
上村英欽三
村林岡了泉
野賢一郎
々木寿
水弥真
橋橋井又
高木行
永石五
春平恒
福忠
星順
堀川秀
松浦錦
山山三
若田平五
林又
34回
今一雄義
小野塚忠夫
小田西久三
大森忠四郎
柏田坤六
神北秀以
北村村治作
木村村吉元
櫛谷谷信
佐久久間信吉
佐木彰栄一
坂藤義治
塚井田大願
長浜浪治
林啓保
林口政介
樋木耕忠
樋吉保雄
堀孝蔵
真宗達利
山野剛亮
渡芳雄
35回
五十嵐久四郎
飯村豊郎
今成一衛
内田善夫
尾崎十兵
岡島秀雄
籠熊倉田貞
熊倉田出林藤
小小近桜林藤
斎沢須相井藤
沢相武寺藤山
舟古丸山

期及氏名
36回
青山勇三
青柳英夫
阿部市蔵
池橋栄
今井木雄
植木木平
宇佐美博
上野一益
加賀田信雄
小川種太郎
加賀田二郎
風間間四夫
河辺政一
金君忠郎
久保昌宣
久田保健
倉田文
佐田玉次
児賢
佐藤藤
斎吉之
斎藤英四
関根達
関根中
関田中清太
田寺井元一
針村貝清一
樋口謙信
福田節
前田九三
藤田
丸塚尾
室宮島美代
宮山田敏
吉川山恒
村
37回
阿部広
浅井村正
伊榎藤並正
遠笠原季
会河内吉
黒川武純
小桜林正三
鈴木木正
田中中郁
田田中中俊
田高富真
野馬原恒
原三武村良
若
38回
安荒石池達
石池石川
太太黒田
田田田沼
正

期及氏名
夫英夫一円郎
信秀虎準
沢藤田一
小加野藤仁
勝野十
清近野野
沢重中謙
笹渋田中
沢関田卷
重田竹石
渋高高仁
関高等野
田田中中
田竹藤石
高高田野
高等田中
田中藤橋
池舟々橋
長細村村
広真村川
早皆宮宮
古皆諸宮
土松五郎
南松山田
長松山田
広若田田
早林田田
古田田田
渡田田辺
39回
阿部助尚
阿部部百
伊藤藤信
石高井正
今原野初
猪崎田虎
上林川恵
大林林孝
川林林藤輝
鎌藤藤裕
北藤藤二
小賀締孝
小光根正
斎橋村栄
佐木山得
志田山
照登川
関田竹
高田辺
中藤40回
福田俊
枡松俊
松松辺
前皆田
皆川妻
村若川
渡田
会浅部
阿安倍
池井村
宇佐
大小沢
小小柳
片熊倉
熊倉田
倉小島

期及氏名
郎市功二
三孝賢
林山藤
小小後敬
白渋七
高田信
田宮弥一
高橋俊
竹竹中忠
池土正五
南主
長広屋
早古学正
谷川卓
瀬正
川山悦
川川淳
松松柄秀
湯吉慎
吉吉一
渡辺市
浅田武
相鋪信
稲野佐
今川正
今金成
神木田
木倉村
坂島
佐井恒
志寿
高藤之
高賀家
高島
高橋英
高橋正
田野正
富田秀
永中豊
中丹五
野布昇
本真昌
丸宮正
山山淵
山山嘉
柳八谷
渡修
渡岸
渡小
渡五
渡実
渡勝
42回
阿部辰
相沢康
有田賢
石山
今井包
今石泉景
薄本洪
小田開
大野隆
大谷総
大谷友一
岡修之
岡嘉
加富
金藤悦
沢

期及氏名
麓雄郎三
勧敬三
木藤辺
々藤辺中
佐宮
佐島田
斎田野
田谷尾
田手健
寺中観
七西尚
西早広
平広
藤藤
藤本
峯村
村山
山
青石市
稲扇
沖大
小鹿
柏河
川木
小小
笹酒
三清
白洪
鈴鈴
関滝
田高
寺等
長橋
長長
谷谷
治本
丸村
綿
46回
上杉
江口
遠藤
遠藤
大越
大津
加熊
鍵藤
片川
熊桐
工上
栗谷
小小
小小
佐谷
渋橋
関野
高島
高橋
谷原
高野
谷屋
塚土
椿

期及氏名
正修
木崎猛
崎田口正
田口沢英
山愛宏
山山吉
49回
相沢春
朝妻惣
赤松元
逢坂邦
荻野上
井田文
内宇佐美
宇小田
小崎富
尾原山
梶原計
梶林勝
神林光
木村竜
工藤弘
倉藤資
小藤幸
駒藤行
斎藤敬
斎藤
佐志藤
志智
白川
清水直
仁保武
高島秀
田中久
田沢和
竹山行
池主
長沼甲
中村子
永村広
羽松一
原田俊
原田湛
林
弘藤文
藤中博
藤田芳
舟崎甚
本裕二
堀田
町田正
丸内憲
見山浩
山定弘
柳生民
渡辺
部
50回
安宅恵
石池田一
池田徳
五十喜郎
今十八郎
岩井勝
海沢信
枝老夫
岡逢正
岡勝道
上村見
上神田秀
苅本田光
部洋太
下広司
木原右
木原玉
黒川成
熊橋恒
轡橋忠
小小本吉
小内達
斎辺尚
田

期及氏名
三哉吉郎
鉄強達一
巻所井紳
鶴富田田
永中見
新早場
馬浜田
原樋浦
広広川
藤本本
本湊
峯横米
山
朝池
飯伊
伊内
岡木
黒倉
剣古
斎斎
清高
高田
巣田
鳥中
中中
新西
広町
水本
森山
山吉
涌渡
秋
阿飯
飯五
大大
小大
樫北
倉小
小近
近佐
諏関
関田
都高
高高
鶴士
銅戸
中林
森野
長樋
本真
水南
望

期及氏名
勲年実
駒一次
柄一亀
山庫
田政
田正
谷本
内深
橋秀
橋真
木田
城正
羽憲
岡一
野山
山口
田島
田沢
田野
田茂
山昌
山儀
沢
野
田
山文
田
飼
慶
賢
敏
雄
稔
平
二
輝
馨
助
録
繁
吉
助
一
昂
男
大
雄
功
郎
雄
茂
男
陽
栄
洋
武
一
威
門
正
郎
蔵
助
作
一
一
男
作
志
夫
作
南
裕
哉
安
三
吾
郎
雄
弘
敏
松
一
郎
彰

期及氏名
正修猛正英
木崎
田口愛宏
沢
49回
沢春吉三
妻惣元敏
松坂邦雄
野上
田文
佐美
田崎富衛
原山計佐
山林勝清
林村光一
藤田竜雄
藤林弘一
藤藤資安
藤智幸孝
川水直男
保島秀弘
中沢久己
山和治
主
沼甲子
村広
松田俊
田田湛
原
林文
弘中博
藤田芳
藤崎甚
裕二
田正
田憲
崎浩
山弘
定民
崎
生
辺部
部松
50回
宅恵一
田田徳
成八郎
喜十弘
井十郎
沢信夫
老正平
村道務
田卓
坂一
田見郎
坂秀也
沼光司
々木弥
谷悦右
井谷成
黒善男
橋橋
本吉
内達
辺尚
田

期及氏名
次孝郎
政
山間忠次
山岩次郎
33回
部佐吉
野英実男
木子英就二
上村英欽三
村林岡了泉
野賢一郎
々木寿
水弥真
橋橋井又
高木行
永石五
春平恒
福忠
星順
堀川秀
松浦錦
山山三
若田平五
林又
34回
今一雄義
小野塚忠夫
小田西久三
大森忠四郎
柏田坤六
神北秀以
北村村治作
木村村吉元
櫛谷谷信
佐久久間信吉
佐木彰栄一
坂藤義治
塚井田大願
長浜浪治
林啓保
林口政介
樋木耕忠
樋吉保雄
堀孝蔵
真宗達利
山野剛亮
渡芳雄
35回
五十嵐久四郎
飯村豊郎
今成一衛
内田善夫
尾崎十兵
岡島秀雄
籠熊倉田貞
熊倉田出林藤
小小近桜林藤
斎沢須相井藤
沢相武寺藤山
舟古丸山

期及氏名
夫英夫一円郎
信秀虎準
沢藤田一
小加野藤仁
勝野十
清近野野
沢重中謙
笹渋田中
沢関田卷
重田竹石
渋高高仁
関高等野
田田中中
田竹藤石
高高田野
高等田中
田中藤橋
池舟々橋
長細村村
広真村川
早皆宮宮
古皆諸宮
土松五郎
南松山田
長松山田
広若田田
早林田田
古田田田
渡田田辺
39回
阿部助尚
阿部部百
伊藤藤信
石高井正
今原野初
猪崎田虎
上林川恵
大林林孝
川林林藤輝
鎌藤藤裕
北藤藤二
小賀締孝
小光根正
斎橋村栄
佐木山得
志田山
照登川
関田竹
高田辺
中藤40回
福田俊
枡松俊
松松辺
前皆田
皆川妻
村若川
渡田
会浅部
阿安倍
池井村
宇佐
大小沢
小小柳
片熊倉
熊倉田
倉小島

期及氏名
郎市功二
三孝賢
林山藤
小小後敬
白渋七
高田信
田宮弥一
高橋俊
竹竹中忠
池土正五
南主
長広屋
早古学正
谷川卓
瀬正
川山悦
川川淳
松松柄秀
湯吉慎
吉吉一
渡辺市
浅田武
相鋪信
稲野佐
今川正
今金成
神木田
木倉村
坂島
佐井恒
志寿
高藤之
高賀家
高島
高橋英
高橋正
田野正
富田秀
永中豊
中丹五
野布昇
本真昌
丸宮正
山山淵
山山嘉
柳八谷
渡修
渡岸
渡小
渡五
渡実
渡勝
42回
阿部辰
相沢康
有田賢
石山
今井包
今石泉景
薄本洪
小田開
大野隆
大谷総
大谷友一
岡修之
岡嘉
加富
金藤悦
沢

期及氏名
熟年実
駒一次
柄一亀
山庫
田政
田正
谷本
内深
橋秀
橋真
木田
城正
羽憲
岡一
野山
山口
田島
田沢
田野
田茂
山昌
山儀
沢
野
田
山文
田
飼
慶
賢
敏
雄
稔
平
二
輝
馨
助
録
繁
吉
助
一
昂
男
大
雄
功
郎
雄
茂
男
陽
栄
洋
武
一
威
門
正
郎
蔵
助
作
一
一
男
作
志
夫
作
南
裕
哉
安
三
吾
郎
雄
弘
敏
松
一
郎
彰

期及氏名
正修猛正英
木崎
田口愛宏
沢
49回
沢春吉三
妻惣元敏
松坂邦雄
野上
田文
佐美
田崎富衛
原山計佐
山林勝清
林村光一
藤田竜雄
藤林弘一
藤藤資安
藤智幸孝
川水直男
保島秀弘
中沢久己
山和治
主
沼甲子
村広
松田俊
田田湛
原
林文
弘中博
藤田芳
藤崎甚
裕二
田正
田憲
崎浩
山弘
定民
崎
生
辺部
部松
50回
宅恵一
田田徳
成八郎
喜十弘
井十郎
沢信夫
老正平
村道務
田卓
坂一
田見郎
坂秀也
沼光司
々木弥
谷悦右
井谷成
黒善男
橋橋
本吉
内達
辺尚
田

期及氏名
三哉吉郎
鉄強達一
巻所井紳
鶴富田田
永中見
新早場
馬浜田
原樋浦
広広川
藤本本
本湊
峯横米
山
朝池
飯伊
伊内
岡木
黒倉
剣古
斎斎
清高
高田
巣田
鳥中
中中
新西
広町
水本
森山
山吉
涌渡
秋
阿飯
飯五
大大
小大
樫北
倉小
小近
近佐
諏関
関田
都高
高高
鶴士
銅戸
中林
森野
長樋
本真
水南
望

期及氏名
勲年実
駒一次
柄一亀
山庫
田政
田正
谷本
内深
橋秀
橋真
木田
城正
羽憲
岡一
野山
山口
田島
田沢
田野
田茂
山昌
山儀
沢
野
田
山文
田
飼
慶
賢
敏
雄
稔
平
二
輝
馨
助
録
繁
吉
助
一
昂
男
大
雄
功
郎
雄
茂
男
陽
栄
洋
武
一
威
門
正
郎
蔵
助
作
一
一
男
作
志
夫
作
南
裕
哉
安
三
吾
郎
雄
弘
敏
松
一
郎
彰

期及氏名

康一子子郎弥紘勝洋雄滋夫夫修介　子恵根昭平哲碧正諒彦樹　義昭親雄之　久博一治昭淳治孝郎一　夫潤隆耕弘紀郎憲明巳　滋二茂修実一

弘誠直朝和勝　政　忠　紀治　濱　71回　知　岩英紘　正　克正　羽　73回　黒部疇　弘　正　野口木　本野田　島隆一　間幸　74回　文　場泉田　上田本　木　憲一　橋秀秀一　75回　上井田本田　啓　76回　芳文徳昭　田田木野北田俊　78回　瀬耕一輝隆　村直昭　80回　川　学　81回　中野ますみ　83回　靖夫　川国伸一　91回　林圭　93回　島芳章

通信制
194名

期及氏名

田井林田原国田下井田山田辺辺　秋井植風川熊小菅滝丸野　内小栗立丹　石磯小中樋鈴中篠藤本　相和上川志鈴関高田藤　川坂上塚福堀　石池熊牧長山吉　古篠　小川

田　浜上木間上倉林井沢山沢　浜知岩　山林原川　黒部野口木野田　場泉田上田木　橋中田　上井田本田　田岡　中田　田川　古

期及氏名

弘願雄枝誠梁明孝康弘門功稔　智俊穂郎作功宏彦治一子一登一亨郎夫真仁司彦允吾浩郎市透　一一作和弥一夫正夫徹衛彦　郎二り二敏子輔教睦旦一樹勝浩子一夫譲夫一衛夫　允枝仙利三史人昭道攻雄介信夫豊

清邦俊　利　喜正佐エ　瑞一信　昌興晋美俊重昭　三信　健達　健　史十　68回　隆晃泰公光康憲　節　泰　69回　太　健か　昌聡隆要義吉　栄芳　恭紘信　嘉謙孝郁　70回　善瑞大秋健正昌紀弘　伴祐　由

期及氏名

野井島田本本地沢口辺六田瀬崎　67回　部井田上泉崎川崎田林　藤田沼根倉橋橋村野井野　井堀田田部　本島ゆ森林町藤藤橋宮川井尾山倉原清塚間山松津山　石小大小小佐佐高田篠敦寺西栃中樋藤本横若吉村　伊小笠風金金川小斎斎清滝田田

高坪寺富橋横福松山渡吉横山　阿石石井今岡小川岸小斎沢菅関高高高仲中永広星松三右山渡　大上北今田田池土中西原渡　石小大小佐佐高田篠敦寺西栃中樋藤本横若吉村

期及氏名

之至夫彦彦元平之美明夫一正一夫男　佑次夫弥子吉一明勝脩一一彦敬郎朗弘功之男磨夫弘彦満通晃夫祐之司篤司　郎厚史郎郎良治夫元郎弘雄雄彰孝夫子子郎郎郎徳青積也義　男一子一三美弘子真男志春也司一治

博　三一直正浩信一昌恒欣　恵昌和　64回　泰慶武一公甚寿　藤浦山口海熊島　崎谷林井藤木井名田木村屋　利昭暉哲　暢　浩　迪豊伸雅　原田根崎内辺　65回　悟　隆三一和一隆　食宅　田野田崎堀崎　巻哲司　藤井藤藤林　輝奈美澄福沢敬一武　崎井田見川　66回　政亮津志聡兼春勝孝　国啓興友篤健文　畑間子島藤藤山谷林木川　石島　池小小風金小加加片熊小鈴下関竹高

佐白鈴滝相滝土土戸庭平福村山渡和　伊池内江内小小川熊小坂佐斎坂椎柴高田土忠塚富中庭星森星松吉山山山渡　安安池石岩梅大大尾金佐白近斎佐三三早滝堤寺藤吉伏皆

期及氏名

明三一夫郎人彰隆俶三郎義稔　昭蔵男至臣恒雄郎郎司明寛真一一男子亮開治郎彦健司也也司愛男稔義博元雄郎一子臣卓夫吉彦一郎愫郎夫男仁夫仁吉雄男彦夫三夫司修郎也真介　達一樹男治雄聡子敏男夫一之一

義享康　淑　浩一和　留正貞士　恒　富　忠二亮　昌粛徳敦　健哲勝　武誠直民　幸　徳　照次誠美国　晴洋俊義二　滋邦康　陸　宥正邦竜輝愛隆順　俊哲　敬　63回　康良治修純　律　道忠淳正勝

川川川正　健　崎黒　嵐　崎　十田原田渕黒成津保村野池藤藤藤藤藤野井内井谷木村子中村村沢川井山川川野村谷　田原野野田田　本国本浦口辺本城辺辺崎　部野羽　泉南田口坂谷畑塚野藤

谷谷谷石野間尾川田嶋村辺部　62回　食木柳木崎十上石岩上石岩小神貝久木河小近佐斉佐佐重白杉坂新鈴田田田田田滝立寺遠中中中中長原平平星星町丸原松三宮三守渡村結渡渡山　阿浅赤池和伊薄江大大小小会斎

長長平知本松宮村矢横渡渡　安青青荒石石五石井岩上石岩小神貝久木河小近佐斉佐佐重白杉坂新鈴田田田田田滝立寺遠中中中中長原平平星星町丸原松三宮三守渡村結渡渡山

期及氏名

誠之夫樹学雄一彦門世介夫満　彰一一司郎雄郎之一也樹男志実真吉司登忍彰直二亨明史郎一功夫一雄史教樹也夫治彦夫雄夫六博昇浩郎男一修男　子郎嘉一一嗣一一一男亮弘夫一司雄司雄繁吾武夫明栄明嵩照理

野山口野由原　幸兵俊佐ェ　英一友　60回　部　嵐邦厚一　紀一一文雅真達夏英嘉　田　常正　昭　智武一　賢　丈捷守卓一正民文悦正信行篤大　一勝達良　栄　道和元壮慶英英栄栄哲　哲秀幸知修英　木　鐘真和　淳和

中早樋広藤藤堀松山山山渡渡　阿五五池石今入上内奥落大岡加片金熊熊熊熊熊小小小小小小小小小小小林山井水木藤山橋中木田波川　本　田田野間崎崎崎辺田　61回　間堀田井城滝矢藤崎田田池嶋杉林林林　藤木　井藤条谷水原馬橋根

期及氏名

一寧義彦吉彰晨一介諒郎郎宏彦二平男五三光也司男　夫哉平治司哉広担章夫一松彦男一夫彦一二浩広吾一男嗣郷吉光茂夫夫司男励平教宏　造男実一郎三男夫郎健樹駿三雄彦明夫行雄一進三彦毅一円蔵一郎健進

静　久恒勝　昭健　藤四六　昭健正正昭順正友康陸　58回　竜末荘整勇欣高　善紀醇勇寅哲熙明俊俊昭　昭祥俊桂詩惣　俊祥幸幸近昇　59回　部邦正　嵐　康吉裕　昌英一　繁　悌文晴克道重一純　幸喜　誠彰勇陽二

谷木見部塚川藤山河崎　川　野柄川井川田辺辺田　村代藤熊桐藤川村鳥良形　井藤藤藤条我木橋村中野山島井崎内浦川山崎谷野田　部十嵐村　素美柳佳　繁　梯晴克道重一純　幸喜　誠彰勇陽二

塩鈴高建高中中並野堀庭広伴星真皆松村吉渡渡山　生植歌遠小片加清木倉解駒近近坂佐佐斉三曾鈴高種田長平福藤藤堀松宮丸宮室矢行　安五飯飯牛宇江小小大奥笠神菊菊倉小小笹佐佐渋茂島鈴関高高高種花

期及氏名

勇夫平雄夫一宏積世夫豊隆　三敬郎造一雄彦彦郎昭彦夫一也登一慧一雄晃吉卓威真禅剛夫男男郎夫昭哉人春修芳栄敏雄男雄夫行彦郎二夫　54・55回　昭良二修壮久雅敏一武一和健哲　元誠仁俊　半　克　達　哲寿和一康　見　誠直正　明助益利一徳義源俊四賢迪

川田原間潟本木橋川沢田辺辺　妻湊健坂島塚藤川岡啓桐林山藤谷木司谷藤木山野福橋井田木崎所々力井村多崎川谷井倉本野尾田村浦山田山辺原田　56・57回　弘邦久兆千幸恒忠　玲信　七　保　戸藤藤田田田田原島島村林島藤藤藤藤間藤

広藤福本桝松正諸吉若山渡　浅今伊逢大大斉芋片小小斉笹渋庄真進鈴砂清早高高土常寺富等永中仁野長星保松細宮前三松村山米渡吉和　阿有市池市井石今岩岩今上逢大折加加岡織小笠籠川木栗小佐佐斎残近

期及氏名

郎弥兌郎郎稔夫隆三三夫郎弥男雄二郎郎二雄助雄雄平二治夫明郎郎一二一郎郎行彰助勲二一等三作克郎滋郎哉衛郎越夫春亘　栄男夫彦元助弥茂吾吾司衛夫武夫稔雄武雄男夫郎義孝造夫夫弥一司丸郎治雄次作功

一富　五志　和　昭隆秀義欣正堅禎　次昭序長常良正竜昭徳　義勝淳昭昭　一義　之　蓁　昭礼　昭洋益二　修　和千　53回　俊邦静嘉　作之　憲憲久忠信　和　久　辰泰武太

定　地田藤泰藤藤藤藤井藤藤藤藤藤田田田谷井保木口笠中中沢橋野波中取尾川井井沢田羽崎本谷川川川田田間川尾川島　田利昭　田崎木田田辺辺　野柳崎沢立月口藤倉桐井合口地代原島林林　井藤川木木崎木本木川山松山井山瀬口沢

菊轡斎斎斎斎斎坂佐佐佐佐沢塩推白真鈴関武田田高高津筑田富長中永長成丹野橋長早広広藤本本皆宮村村森森山湯吉吉渡渡　飯一石石今稲江遠大片笠河川菊久栗小小小近坂佐笹鈴鈴田高橋前増高高長西野野広

期及氏名

寛夫宏一正作雄一夫尚良明聡誠懋夫郎新一進次明治郎績　夫彦武弘輔一司博治宏策郎毅治謙治二治爾渡郎熙郎一二治之啓男了一良晋強孝人浩朗和雄太吉一次雄誠寛男郎次男郎雄　秀夫元彦一栄郎男八二吉男陽

鶴寺中根橋長原馬一平藤布古堀前真三宮諸渡渡山山山吉　青赤厚荒五岩池歌永大大小落岡笠鹿笠唐勝河河川小小小小近坂笹斎斎茂島島須巣菅竹高田千中西花浜原藤細藤堀真山百　青安稲磯石小押折加河川北木

秀亮洋　川敏賢俊　義栄　信　三五　謙　欣久璋芳　51回　博貞　奥之健剛正正昭　雄六　耕　幸仰浅新　太　富欣孝慎俊上重　素録　重恵　政義泰繁泰新省忠　繁一信三一和

田田村本本谷田場柳石井施川　川柄浦島橋辺辺川田岸沢　十木井地井十嵐城田川木川関黒昭合本井島原沢山路内研瀬宮林林林藤野川藤藤野田岡貝山野島橋中葉川脇井田田由貝井川壁田川精

期及氏名

郎　富　田　藤　藤　井　藤　藤　藤　田　谷　井　保　木　口　笠　中　中　沢　橋　野　波　中　取　尾　川　井　井　沢　田　羽　崎　本　谷　川　川　川　田　田　間　川　尾　川　島　田　利　昭　木　田　田　辺　辺　53回　俊　邦　静　嘉　作之　憲　憲　久　忠　信　和　久　辰　泰　武　太

一　定　地　菊　斎　斎　斎　斎　斎　坂　佐　佐　佐　佐　沢　塩　推　白　真　鈴　関　武　田　田　高　高　津　筑　田　富　長　中　永　長　成　丹　野　橋　長　早　広　広　藤　本　本　皆　宮　村　村　森　森　山　湯　吉　吉　渡　渡　野柳崎沢立月口藤倉桐井合口地代原島林林　井藤川木木崎木本木川山松山井山瀬口沢

期及氏名

康　子　郎　弥　紘　勝　洋　雄　滋　夫　夫　修　介　子　恵　根　昭　平　哲　碧　正　諒　彦　樹　義　昭　親　雄　之　久　博　一　治　昭　淳　治　孝　郎　一　夫　潤　隆　耕　弘　紀　郎　憲　明　巳　滋　二　茂　修　実　一

弘誠直朝和勝　政　忠　紀治　濱　71回　知　岩英紘　正　克正　羽　73回　黒部疇　弘　正　野口木　本野田　島隆一　間幸　74回　文　場泉田　上田本　木　憲一　橋秀秀一　75回　上井田本田　啓　76回　芳文徳昭　田田木野北田俊　78回　瀬耕一輝隆　村直昭　80回　川　学　81回　中野ますみ　83回　靖夫　川国伸一　91回　林圭　93回　島芳章

通信制
194名

期及氏名

弘願雄枝誠梁明孝康弘門功稔　智俊穂郎作功宏彦治一子一登一亨郎夫真仁司彦允吾浩郎市透　一一作和弥一夫正夫徹衛彦　郎二り二敏子輔教睦旦一樹勝浩子一夫譲夫一衛夫　允枝仙利三史人昭道攻雄介信夫豊

清邦俊　利　喜正佐エ　瑞一信　昌興晋美俊重昭　三信　健達　健　史十　68回　隆晃泰公光康憲　節　泰　69回　太　健か　昌聡隆要義吉　栄芳　恭紘信　嘉謙孝郁　70回　善瑞大秋健正昌紀弘　伴祐　由

期及氏名

野井島田本本地沢口辺六田瀬崎　67回　部井田上泉崎川崎田林　藤田沼根倉橋橋村野井野　井堀田田部　本島ゆ森林町藤藤橋宮川井尾山倉原清塚間山松津山　石小大小小佐佐高田篠敦寺西栃中樋藤本横若吉村　伊小笠風金金川小斎斎清滝田田

高坪寺富橋横福松山渡吉横山　阿石石井今岡小川岸小斎沢菅関高高高仲中永広星松三右山渡　大上北今田田池土中西原渡　石小大小佐佐高田篠敦寺西栃中樋藤本横若吉村

期及氏名

之至夫彦彦元平之美明夫一正一夫男　佑次夫弥子吉一明勝脩一一彦敬郎朗弘功之男磨夫弘彦満通晃夫祐之司篤司　郎厚史郎郎良治夫元郎弘雄雄彰孝夫子子郎郎郎徳青積也義　男一子一三美弘子真男志春也司一治

博　三一直正浩信一昌恒欣　恵昌和　64回　泰慶武一公甚寿　藤浦山口海熊島　崎谷林井藤木井名田木村屋　利昭暉哲　暢　浩　迪豊伸雅　原田根崎内辺　65回　悟　隆三一和一隆　食宅　田野田崎堀崎　巻哲司　藤井藤藤林　輝奈美澄福沢敬一武　崎井田見川　66回　政亮津志聡兼春勝孝　国啓興友篤健文　畑間子島藤藤山谷林木川　石島　池小小風金小加加片熊小鈴下関竹高

佐白鈴滝相滝土土戸庭平福村山渡和　伊池内江内小小川熊小坂佐斎坂椎柴高田土忠塚富中庭星森星松吉山山山渡　安安池石岩梅大大尾金佐白近斎佐三三早滝堤寺藤吉伏皆

期及氏名

明三一夫郎人彰隆俶三郎義稔　昭蔵男至臣恒雄郎郎司明寛真一一男子亮開治郎彦健司也也司愛男稔義博元雄郎一子臣卓夫吉彦一郎愫郎夫男仁夫仁吉雄男彦夫三夫司修郎也真介　達一樹男治雄聡子敏男夫一之一

義享康　淑　浩一和　留正貞士　恒　富　忠二亮　昌粛徳敦　健哲勝　武誠直民　幸　徳　照次誠美国　晴洋俊義二　滋邦康　陸　宥正邦竜輝愛隆順　俊哲　敬　63回　康良治修純　律　道忠淳正勝

川川川正　健　崎黒　嵐　崎　十田原田渕黒成津保村野池藤藤藤藤藤野井内井谷木村子中村村沢川井山川川野村谷　田原野野田田　本国本浦口辺本城辺辺崎　部野羽　泉南田口坂谷畑塚野藤

谷谷谷石野間尾川田嶋村辺部　62回　食木柳木崎十上石岩上石岩小神貝久木河小近佐斉佐佐重白杉坂新鈴田田田田田滝立寺遠中中中中長原平平星星町丸原松三宮三守渡村結渡渡山　阿浅赤池和伊薄江大大小小会斎

長長平知本松宮村矢横渡渡　安青青荒石石五石井岩上石岩小神貝久木河小近佐斉佐佐重白杉坂新鈴田田田田田滝立寺遠中中中中長原平平星星町丸原松三宮三守渡村結渡渡山

期及氏名

誠之夫樹学雄一彦門世介夫満　彰一一司郎雄郎之一也樹男志実真吉司登忍彰直二亨明史郎一功夫一雄史教樹也夫治彦夫雄夫六博昇浩郎男一修男　子郎嘉一一嗣一一一男亮弘夫一司雄司雄繁吾武夫明栄明嵩照理

野山口野由原　幸兵俊佐ェ　英一友　60回　部　嵐邦厚一　紀一一文雅真達夏英嘉　田　常正　昭　智武一　賢　丈捷守卓一正民文悦正信行篤大　一勝達良　栄　道和元壮慶英英栄栄哲　哲秀幸知修英　木　鐘真和　淳和

中早樋広藤藤堀松山山山渡渡　阿五五池石今入上内奥落大岡加片金熊熊熊熊熊小小小小小小小小小小小林山井水木藤山橋中木田波川　本　田田野間崎崎崎辺田　61回　間堀田井城滝矢藤崎田田池嶋杉林林林　藤木　井藤条谷水原馬橋根

期及氏名

一寧義彦吉彰晨一介諒郎郎宏彦二平男五三光也司男　夫哉平治司哉広担章夫一松彦男一夫彦一二浩広吾一男嗣郷吉光茂夫夫司男励平教宏　造男実一郎三男夫郎健樹駿三雄彦明夫行雄一進三彦毅一円蔵一郎健進

静　久恒勝　昭健　藤四六　昭健正正昭順正友康陸　58回　竜末荘整勇欣高　善紀醇勇寅哲熙明俊俊昭　昭祥俊桂詩惣　俊祥幸幸近昇　59回　部邦正　嵐　康吉裕　昌英一　繁　悌文晴克道重一純　幸喜　誠彰勇陽二

谷木見部塚川藤山河崎　川　野柄川井川田辺辺田　村代藤熊桐藤川村鳥良形　井藤藤藤条我木橋村中野山島井崎内浦川山崎谷野田　部十嵐村　素美柳佳　繁　梯晴克道重一純　幸喜　誠彰勇陽二

塩鈴高建高中中並野堀庭広伴星真皆松村吉渡渡山　生植歌遠小片加清木倉解駒近近坂佐佐斉三曾鈴高種田長平福藤藤堀松宮丸宮室矢行　安五飯飯牛宇江小小大奥笠神菊菊倉小小笹佐佐渋茂島鈴関高高高種花

期及氏名

勇夫平雄夫一宏積世夫豊隆　三敬郎造一雄彦彦郎昭彦夫一也登一慧一雄晃吉卓威真禅剛夫男男郎夫昭哉人春修芳栄敏雄男雄夫行彦郎二夫　54・55回　昭良二修壮久雅敏一武一和健哲　元誠仁俊　半　克　達　哲寿和一康　見　誠直正　明助益利一徳義源俊四賢迪

川田原間潟本木橋川沢田辺辺　妻湊健坂島塚藤川岡啓桐林山藤谷木司谷藤木山野福橋井田木崎所々力井村多崎川谷井倉本野尾田村浦山田山辺原田　56・57回　弘邦久兆千幸恒忠　玲信　七　保　戸藤藤藤田田田田原島島村林島藤藤藤藤間藤

広藤福本桝松正諸吉若山渡　浅今伊逢大大斉芋片小小斉笹渋庄真進鈴砂清早高高土常寺富等永中仁野長星保松細宮前三松村山米渡吉和　阿有市池市井石今岩岩今上逢大折加加岡織小笠籠川木栗小佐佐斎残近

期及氏名

郎弥兌郎郎稔夫隆三三夫郎弥男雄二郎郎二雄助雄雄平二治夫明郎郎一二一郎郎行彰助勲二一等三作克郎滋郎哉衛郎越夫春亘　栄男夫彦元助弥茂吾吾司衛夫武夫稔雄武雄男夫郎義孝造夫夫弥一司丸郎治雄次作功

一富　五志　和　昭隆秀義欣正堅禎　次昭序長常良正竜昭徳　義勝淳昭昭　一義　之　蓁　昭礼　昭洋益二　修　和千　53回　俊邦静嘉　作之　憲憲久忠信　和　久　辰泰武太

定　地田藤泰藤藤藤藤井藤藤藤藤藤田田田谷井保木口笠中中沢橋野波中取尾川井井沢田羽崎本谷川川川田田間川尾川島　田利昭　田崎木田田辺辺　野柳崎沢立月口藤倉桐井合口地代原島林林　井藤川木木崎木本木川山松山井山瀬口沢

菊轡斎斎斎斎斎坂佐佐佐佐沢塩推白真鈴関武田田高高津筑田富長中永長成丹野橋長早広広藤本本皆宮村村森森山湯吉吉渡渡　飯一石石今稲江遠大片笠河川菊久栗小小小近坂佐笹鈴鈴田高橋前増高高長西野野広

期及氏名

寛夫宏一正作雄一夫尚良明聡誠懋夫郎新一進次明治郎績　夫彦武弘輔一司博治宏策郎毅治謙治二治爾渡郎熙郎一二治之啓男了一良晋強孝人浩朗和雄太吉一次雄誠寛男郎次男郎雄　秀夫元彦一栄郎男八二吉男陽

鶴寺中根橋長原馬一平藤布古堀前真三宮諸渡渡山山山吉　青赤厚荒五岩池歌永大大小落岡笠鹿笠唐勝河河川小小小小近坂笹斎斎茂島島須巣菅竹高田千中西花浜原藤細藤堀真山百　青安稲磯石小押折加河川北木

秀亮洋　川敏賢俊　義栄　信　三五　謙　欣久璋芳　51回　博貞　奥之健剛正正昭　雄六　耕　幸仰浅新　太　富欣孝慎俊上重　素録　重恵　政義泰繁泰新省忠　繁一信三一和

田田村本本谷田場柳石井施川　川柄浦島橋辺辺川田岸沢　十木井地井十嵐城田川木川関黒昭合本井島原沢山路内研瀬宮林林林藤野川藤藤野田岡貝山野島橋中葉川脇井田田由貝井川壁田川精